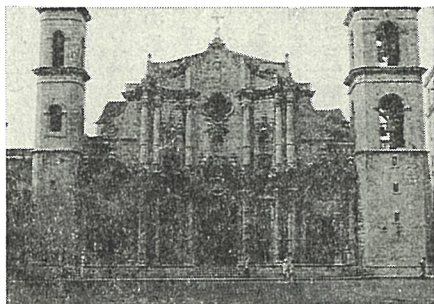




大聖堂（ハバナ旧市街）

キューバ紀行

神代修

カリブ海域の文化や歴史を主たる研究対象にしているのが、同海域の最大の島キューバをときおり訪問する。五度目にあたる最近の旅行は、在外研究期間中の一九八四年七月のことで、留学地のスペインから大西洋を横断してのキューバ入りであった。

それまでの四回の旅行で、西の旧ピナール・デル・リオ州（キューバでは、一九七六年の制度改革によっていままでの六州から十六州に地方行政単位が変更された）からステイブンソンの『宝島』のモデルになったといわれるピノス島（現在は「青年の島」と改称、それに東部の旧オリエンテ州にいたるまで、中部の一部の州を除きほぼ全土を踏破することができたので、今回は日程の都合を考慮に入れて、首都ハバナにだけ滞在することにした）。

ハバナを訪れる観光客もしくは招待客は、受け入れ機関の指示に従って新市街にあたるベダード地区のホテルに投宿することになっている。私の今回の旅行もその例外ではなかった。ベダードを中心とする西ハバナの新市街地は、「砂糖ブーム」にわ

いた一九二〇年代に主として北アメリカ資本によって開発された地区であり、そこには旧ヒルトンその他の北アメリカ系ホテルが林立しているが、一九五九年に革命が成立すると、それらのホテル群はキューバ政府によって接収され名称が変更されて、いまは国営ホテルとして運営されている。

私が宿泊した「アバナ・リブレ」は旧ヒルトンホテルで、二十五階建ての白亜の偉容を天空に誇示しているが、外観の立派さにくらべて設備の老朽化がいちじるしく、あちこちに補修のあとがうかがわれる。しかし繁華街の中心に位置しているうえに、キューバ旅行の主たる目的先であるハバナ大学やキューバ作家芸術家同盟、対外文化機関の両アメリカ会館などが近くにあるので、立地条件は申し分ない。

ハバナ大学は夏休みに入っていてキャンパスには人がなく閑散としていたが、キューバ作家芸術家同盟を訪れると、すぐに同盟議長のニコラス・ギリエン（一九〇二年に会うことができた。一九六一年に同盟結成以来議長を勤めているギリエンは、八十二歳の高齢ながら毎日事務室の机



ニコラス・ギリエンと筆者（キューバ作家芸術家同盟で）

に向かっているとのこと。何冊かの邦訳がある彼の詩集は、アフロキューバ詩にエポックを画したもので、ラテンアメリカ詩の視点から見ても、チリのノーベル賞詩人パブロ・ネルーダの詩に匹敵するとの評価が高い。

先年来日したとき広島へ同道したが、広島通信病院長で被爆者の蜂谷道彦博士の『広島日記』（法政大学出版局刊）の英訳本

を読んでそれにいたく感動したギリエンは、原爆資料館で写真や遺品を見て、その悲惨さに改めて驚いていた。ギリエンには「原子爆弾」と題するこんな風刺詩がある。

これは爆弾です。よく見て下さい。目下安眠中です。どうかそっとしておいて。ステッキ、棒、木切れ、石で刺激しないこと。餌の投げ入れを禁ず。手と目に注意！

立て札にこんな掲示がしてあるのに、だれも大臣閣下さえも無視している。この動物は危険から狂暴なり。

（詩集『大動物園』より）

また俳句をこよなく愛好するギリエンは、日本人から贈られた千羽鶴の折り紙を題材にして、俳句形式の小詩をやはり『大動物園』の中でこつこつとつづっている。

籠のなか一羽まどろむ紙の鳥。

仕事のことを別にすれば、私はアメリカ

ナイズされた近代的な新市街よりは東のハバナ湾に面した旧市街の方が好きで、キューバを訪れるたびに足はそこへ向きがちである。旧ハバナとか植民地風ハバナとか呼ばれている旧市街は、サン・クリストバル・デ・ラ・アバーナの旧名で一五一九年に建設されてこのかた五世紀近い歴史を持つており、そこには十七世紀のバロック様式や十八世紀のネオクラシック様式の建築物がいまもそのまま残っている。

たとえば、ハバナ湾に近い大聖堂や旧総督官邸などがそうした建造物であるが、しかしそれにもまして興味をひくのは「マレコン」と呼ばれるカリブ海に面した防波堤通りからハバナ湾の港通りにかけて随所に見られる古い要塞や城塞などで、それらは



ニコラス・ギリエン

一五三八年以降フランスやイギリスの海賊の襲撃・掠奪からハバナを守るために相次いで建設されたものである。

また海岸通りの要塞・城塞とは別に、やはり防備のため市街にも城壁が張りめぐらされることになり、一六七四年から一七六七年にかけてそれらは建設されたが、こうしてできあがった当時のハバナの市街はさながら中世の「城塞都市」(シウダデラ



植民地時代の建物(ハバナ旧市街)

のようであった、と史書は伝えている。

ハバナの旧市街は古くて新しい。というのは、旧総督官邸は革命後市立博物館に生まれかわっているし、要塞や城塞は史跡として内外の観光客の誘致に一役かっているからである。また大聖堂の広場はコンサートや民族舞踊などの行事に使用されるとともに、土曜日の午後にはそこで民芸品や本などの市が立つ。それに、広場に面した旧貴族の邸宅は、「エル・パティオ」という著名なレストランとして再生しているのである。

レストランといえば、大聖堂の西側の小路に面した「ボデギータ・デル・メディオ」は、内外の著名人とりわけ知識人が訪れることで知られている。壁一面に落書き



レストラン「ラ・ボデギータ・デル・メディオ」(ヘミングウェイがよく通った)

がみられ、またそこで出される「コングレ」という黒豆と米を炊き合わせたキューバ田舎料理とキューバのラム酒をベースにした「モヒート」というカクテル酒が客の人気を呼んでいる。

アジェンデ大統領、ラングストン・ヒューズ、サルトル、ボーボワール、サガンらが訪れたこのレストラン、というよりも居



ハバナ新市街のホテル群

酒屋と呼ぶにふさわしいこの店は、キューバをこよなく愛しキューバを第二の祖国としたヘミングウェイが、しげしげ足を運んだことでも知られている。

ヘミングウェイについていえば、やはり旧市街の「ラ・フロリディータ」も彼の愛好するレストランであった。この新鮮なエビ料理とやはりラム酒をベースにした「ダイキリ」と呼ばれるカクテル酒が、「モヒート」同様、ヘミングウェイの好物であった。カクテルグラスを手にしたヘミングウェイの写真が店内に飾られている。

ヘミングウェイは一九四二年、ハバナの郊外サン・フランシスコ・デ・パウラに広大な農場を購入し、そこに一九六一年まで住みついたが、それ以前には旧市街の「ア



ラ・フェルサ城塞
(ハバナ旧市街)

ンボス・ムンドス」というホテルに宿泊し、そこで『たがために鐘は鳴る』を書き上げた。そして前記の農場を入手するのに、その印税を投じたといわれている。

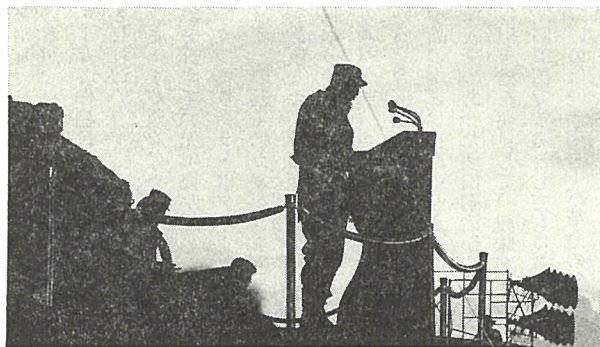
農場での日課によると、午前中は執筆に、いそしみ、午後は車で十五分で行ける漁村コヒーマルから愛用の「ピラール号」を駆って、カリブ海でのマカジキ釣りを楽しんだという。一九五二年に書き上げた『老人と海』は、コヒーマルの老漁民サンティアゴにまつわる物語りであり、彼は主としてこの作品によって一九五四年度のノーベル文学賞を受賞したのである。

農場からの眺望は、「ビヒア」(展望台)というその名称が示すように、まことにすばらしい。現在には博物館になっているその三階の旧書斎からはハバナ湾を遠望できるし、農場周辺にキューバ特有のみごとな大王やしが真直ぐ林立しているのが一望できる。

また庭園にはブーゲンビリアや火炎木など亜熱帯産の植物が一面に咲きほこっている。それに、館内にはばう大な蔵書やミロ、クレー、マッソンらの絵画、アフリカ

で獲ったライオンの毛皮、カリブ海で釣ったサメの歯牙などが彼の生存中と同じ状態で残されている。この博物館を含め、ハバナにはヘミングウェイ研究に欠かせない場所が多い。

旧市街に話をもどすと、ニコラス・ギリ

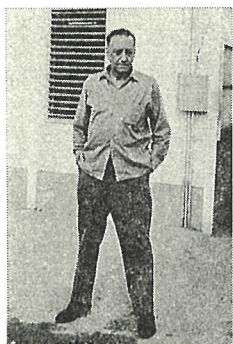


演説するカストロ首相

エンと並んで世界的に有名なキューバの作家アレホ・カルペンティエール（一九〇四—一九八〇）は旧市街で生まれ、そこをこよなく愛した。

カルペンティエールはフランス系キューバ人で、キューバよりも外国とくにフランスでの生活が長く、そんなことで当初はシュルレアリストとしてデスノス、ブルトン、アラゴン、ピカソ、ダリ、ストラビンスキーらと交遊していたが、一九四三年にフランスの名優ルイ・ジュベとともに旅行したハイチでラテンアメリカの「驚異的現実」に衝撃を受け、それ以後作風を一変して、再出発することになった。

一九六〇年代半ばから「世界的ブーム」をひき起こしたラテンアメリカ文学の旗手として、ノーベル賞作家ガルシア・マル



キューバの世界的作家
アレホ・カルペンティエール



「キューバ革命の父」
ホセ・マルティ

ケスとともに最も注目されている作家であるが、ガルシア・マルケスの作品がどちらかといえば素人向けであるのに対し、カルペンティエールのそれは玄人向けであるというのが専門家の見解である。

二冊の拙訳を含めて七冊の邦訳があるが、いずれも新旧両大陸を舞台にした雄大な内容を持ち、バロック的できらびやかな文体でつづられた傑作ばかりである。その一つで彼の最後の作品『ハープと影』（新潮社刊）は、偉大なる航海者・新大陸発見者としてのコロンブスにまつわる神話の解体と、偶像の破壊とを企図した問題作である。

五年後の新大陸発見五百周年に向けて、スペインではバルセロナでのオリンピック開催、セビリヤとパリでの万国博共催

を中心とした多くの記念行事が予定されているが、その時期が近づけばカルペンティエールの作品は一石を投ずることになるかもしれない。

キューバ政府はカルペンティエールの業績を賛えて、先年彼が愛した旧市街の一面に、つまり「ラ・ボデギータ・デル・メデイオ」の近くにカルペンティエール資料館を設置した。そこには彼の手稿、各国語の訳本、絵画、写真などが展示され、内外のカルペンティエール愛好家の注目を集めている。今回そこを訪れたとき、数多くの展示品の中に、長期に及ぶ彼のバリ在住時代に親交のあった藤田嗣治から贈られた陶器の招き猫を発見して、興味深かった。

旧市街でなんとしても見落すことのできないのは、「キューバ革命の父」といわれるホセ・マルティ（一八四二—一八九五）の生家であろう。マルティは短い生涯をキューバの独立運動に捧げ、その間流刑と亡命をくり返し、最終的には亡命地ニューヨークからキューバに遠征して、独立戦争の緒戦で壮烈な死を遂げた劇的な人物である。

しかし多忙な独立運動の中で詩人・作家としての文学活動を怠らず、すぐれた文学作品を数多く残している。とくに詩人としての彼は、いままでのスペイン詩の影響を排除してモデルニスモ（近代主義）という新しいジャンルの詩を確立したことで知られている。そうした文学作品を含め、全二十七巻に及ぶ彼の著作集が革命後発行されている。

キューバは一九六一年以降社会主義国になったが、いまでもキューバではマルクスやレーニン、それにカストロよりもマルティの写真や肖像画の方が数多く見られ、マルティは、国民の最大の敬愛の対象になっている。それが、キューバの社会主義をユニークなものにしている一因であろう。ハバナの旧市街にある中央駅に近い彼の生家は、小さくて質素な造りながら、そこを訪れる内外の観光客は絶えない。

ハバナでは、ホセ・マルティにゆかりのある場所として、生家のほかに「ホセ・マルティ研究センター」を挙げることができ。同センターは、以前には新市街のはずれの革命広場に面した国立図書館内にあっ

たが、いまは新市街のベダードの閑静な場所に移っている。かつてマルティの遺族たちが住んでいた家だという。

研究センターで中心になって研究活動をしているのは、シンティオ・ビティエールとフィナ・ガルシア・マルスという夫妻のカトリック系詩人・作家であり、二人とも革命前から純粋詩グループに属し、その機関誌「オリヘネス」で活躍していた。ラテンアメリカでは知名人であった。

周知のように、ラテンアメリカ各国ではカトリックの影響が圧倒的に強く、キューバもその例外ではない。キューバでは革命後も信仰の自由が保障されていて、信者が日曜日ごとに教会に通う習慣は消えていない。また右の夫妻のように、社会主義体制になった今日でもカトリック系作家として政府の文化政策を是認し、それに協力している文化人も多い。

その反面、若い世代の人たちに宗教離れの傾向が強まっていることはたしかだし、カトリック系の作家を含め、少数の知識人たちが革命後の文化政策に反発して、亡命の道を選んでいることも事実である。そう

した態度に対し、キューバ政府が「去る者は追わず」の立場をとっているのは、ソビエトのそれとちがっていて、興味をひくところである。（了）

（大学経済学部教授）

表紙の言葉

栄光館

シンメトリーに、ゆったりと横に広がっているのが、中央の堂がいつそうしつかりとした構えになっている。正面からは、何回かスケッチしてみたが、なかなかうまくいかない。何年か前にこの礼拝堂の後方なめ上からスケッチして作品にしようと思ひ、途中までやってそのままになっている。そのうちに仕上げようと思っている。

上野富二郎

（女子中学・高等学校嘱託講師）